

---

# DOG DAYS ~ ~ ~ 蒼炎の勇者 ~ ~ ~

T E

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DOG DAYS~~~~蒼炎の勇者~~~~

### 【Nコード】

N7979V

### 【作者名】

TE

### 【あらすじ】

この物語は異世界『フロニヤルド』の『ビスコッティ共和国』に召還された勇者シンク・イズミ。そして、とある事情で飛ばされた地球の史上最大のオンラインネットゲーム『The World』を救った勇者カイト。この二人の勇者が奏でる物語

**EPISODE 1 『勇者誕生!』 (前書き)**

気まぐれに書いてしまった小説です

読んでくれたら嬉しいです

## EPISODE 1 『勇者誕生!』

ここは『異世界』フロニャルド

現在、『ガレット獅子団』が『ビスコッティ共和国』に『戦』を仕掛けている

『ビスコッティのみなさん、ガレット獅子団のみなさん、お待たせしました!』

そんな戦にビスコッティ共和国代表領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティ姫殿下がマイクを持ち話し始める

『近頃、敗戦続きな我らがビスコッティですがそんな残念展開は今日限りでおしまいです!』

姫殿下の話に戦をしていた戦士達が注目する

『戦』と言っても国交手段であると同時に、国民が参加して運動や競争を楽しむイベントでもある

そんなビスコッティ共和国はミルヒオーレ（以後ミルヒ）の言う通り、今、戦をしているガレット獅子団に敗戦続き

そこでミルヒは最後の手段を使った

『ビスコッティに希望と勝利をもたらしてくれる素敵な勇者様が来てくださいましたから』

そう言う空中に浮かぶモニターが一人の少年を映し出す  
両戦士達はそのモニターに釘付けだ

『華麗に鮮烈に、戦場に登場してもらいましょう!』

「ふっ!」

高台の上にあった勇者と呼ばれた少年がそこから飛び降りた

その身のこなしから、勇者に相応しい身体能力であることがわかる

「姫様からのお呼びにあずかり、勇者シンク。ただいま見参!」

『ゆ、ゆ』

実況をしているフランボワーズ・シャルディの声が震える

『勇者降臨!!ここフロニヤルドで国を治める王や領主のみが許された。勇者召還!』

『私も見るのは初めてです』

解説をしているバナード將軍も物珍しそうに勇者シンクを見ている

『そう!そんな稀少な勇者が今、我々の目の前に現れましたあ!!』

「「「わあああああああつ!!!!!!」」」

勇者<sup>シンク</sup>が現れたことに戦士達は大騒ぎ

しかし、誰も気づいていなかった。勇者は一人だけではなかったことを

「う　　うつ　　ここは　　？」

ここは戦場から少し離れた森の中  
そこには、赤い服と帽子を着た少年がいた

「なんで僕はここに　　？確か　　そうだ。エリアの調査をしていたら　　」

この少年の名前はカイト  
地球の史上最大のオンラインネットゲーム『The World』  
の勇者、と人々から言われている  
そんなカイトが何故ここ（フロニヤルド）にいるのか、原因はわからない

「うーん　　ダメだ。思い出せない　　」

頭に霧がかつたように思い出せないカイト

「とりあえず、ここがどこなのか調べないと　　」

カイトは近くに落ちていた武器『英雄の双剣』を拾い手がかりを探し始めた

「これはまた、やるもんですな」

ガレット獅子団の本陣

ゴドウィン將軍とその隣にいる銀髪の少女はこのガレット獅子団の領主レオンミシェリ・ガレット・デ・ロワ（以後『レオ』）

二人はシンクの活躍を目の当たりにして大絶賛だが、そんな悠長にしている場合ではない

「ふん、面白い。どれ、一つ試してみるかの」

不敵な笑みを浮かべるレオは動き始める

「「「うおおおおおおおおお！！」」」

ガレット獅子団の戦士達がビスコッティ領地へと突撃する。だが、それを遮るように一人の緑髪の少女が立ちふさがる

「姫様の決断といえ、べつに勇者など居なくても！！」

この少女はビスコッティ騎士団の親衛隊長『エクレール・マルティノッジ』（以後エクレ）

どうやらエクレは勇者召還を反対していたようだ

エクレの背後に光り輝く紋章が現れる

「裂空十文字！！」

エクレが持つ双剣から十字を描いた何かを撃ち放つ

直撃した戦士達は爆風とともに『猫玉』になって吹き飛ばされた

猫玉とはダメージを喰らったり、頭や背中を触られるとノックアウト判定となり一定時間無力化となる。ちなみにビスコッティ側は『犬玉』

「せいやあ！！」

「うっ！？」

爆風とともに起こった煙により生き残りがいたことに気づかなかったエクレは油断していたため反応が遅れてしまった



「勇者キ~~~~ック!~!」

「ぐはっ!~?」

ピンチのときに現れる

まさに勇者のようなタイミングでシンクが参上  
横から不意打ちは勇者とは言えないと思うが

「オッス!勇者として喚んでもらいました。シンク・イズミです!  
!」

「エクレール。騎士団の親衛隊長だ」

「エクレール、さっきのビームってやつぱり『あれ』?」

まるで漫画やゲームに出てきそうな技に興奮気味のシンク

「ビー       ?『紋章砲』のことか?」

「それです!」

『紋章砲』とはフロニヤルドの大地と空に眠るフロニヤ<sup>ちから</sup>力を集めて  
使う技術

「紋章砲の扱いはエクレールが上手だから、教えてもらおうようにっ  
て姫様が」

「そ、そうか       」

一瞬、嬉しそうな表情をするエクレール

ミルヒに褒められたのが嬉しかったのだろう

「まずは自分の紋章を発動させる」

「紋章発動！レベル1！」

二人の手の甲から小さな紋章が現れる

「全身の力と輝合いを込めて紋章を強化！」

手の甲から背後へと移り大きくなった

「レベル2」

「レベル3！！！」

背後の紋章が大きくなり、その紋章がはっきり見えるようになる。  
力が大きくなっている証拠

「フロニヤ力を輝に変えて自分の武器から撃ち放つ！」

「それが、紋章砲！！」

「うおりゃあああああっ！！！！！！」

再びガレット獅子団の戦士達がシンク達に襲いかかる

「いやあああああああっ！！！」

「はああああああああっ！！！」

ドガアアアアアンッ！！！！

二人の紋章砲がガレット獅子団の戦士達を蹴散らした  
まるで雨のように猫玉が降ってくる  
それほど二人の紋章砲は強烈なのだ

「紋章砲は便利だが、防具や甲冑を許された戦士長や騎士には防が  
れることも多い。それに何より」

「撃つと結構疲れるね」

「よく考えて使え」

「ありがとうございます！頑張ります！」

「  
」

信用していないのか険しい顔でシンクを見るエクレ

「あつ  
」

「なっ!？」

いきなりどこからかフロニヤ力を纏った弓矢がシンクを襲う

「うわっ!？」

「うわあああっ!？」

いち早く気づいたエクレは双剣で防ぐも、その威力に負けシンクとエクレは吹き飛ばされる

それでもなんとか軌道をそらすことには成功

その弓矢は浮き島に当たった瞬間、べちゃつとガムのようになる。

もし当たっていたら身動きがとれずその時点で負けとなっていただろう

「ほんのちびつと期待して来てはみたが  
所詮は犬姫の手下か」

「あっ!？レオンミシエリ姫!？」

現れたのは巨大な鳥に乗ったレオがいた

「姫などと気安う呼んでもらっては困るのう。我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして百獣王

の騎士。閣下と呼ばんか。この無礼者が!!」

レオの紋章が光り輝く

その輝きは気高き王に相応しいものと言えよう

『キタアアアッ！来ました!!レオンミシエリ閣下!!!!戦場到着。愛騎ドーマも相変わらず凛々しい!!』

「ふっはははっ!!それはさておき、ワシは先に進ませてもらう。はいよおっ!!」

レオは愛騎ドーマを操り先へと進む

「ちょっ、うわぁ!!」

先に進ませる訳にはいかないのだがさっきの衝撃でエクレに乗っかわられる態勢となっており身動きがとれない

「勇者、邪魔だ!退け!!」

「いや、そっちこそ!!」

シンクはエクレをどかそうと手を伸ばすが

むにゅ

「うわあっ!?!」

「えっ? あっ、ごめん」

咄嗟に謝るシンクだが、自分の手に感じる感触に一つの結論に基づいた

「女の子?」

「あ、あっ!?!」

そのシンクの悪気のない一言にエクレは固まってしまった  
しかし、それはすぐに怒りへと変わった

「この」

「えっ?」

「スット」勇者があっ!?!」

ドゴオンッ！！

「うわあああッ！？」

エクレの乙女の一撃に吹き飛ばされる

『おおっと仲間割れか？そしてこの勇者、意外とアホかあ？』

アホなのだろう

EPISODE 1『勇者誕生!』(後書き)

ああ……

どうしよう……

まだ他の小説も終わっていないのに投稿なんて……

まあ、いいか？

すみません、冗談です

どちらも頑張りたいと思います



## EPISODE 2 『勇者対百獣王の騎士』

「撃てえ!!」

ビスコッティの弓矢部隊が着々と進むレオに向かって一点砲火

「ふんっ!!」

しかし、レオは慌てることなく、斧を呼び出し回転させることで全ての弓矢を弾き飛ばす  
その人離れた技術に啞然とする弓矢部隊

「たあああっ!!」

「「「ぎゃあああっ!!」」」

難無く弓矢部隊を撃破するレオ  
すぐさま難関である『すべすべ床のすり鉢エリア』  
ここを抜ければ最終防衛戦まで後少し

「駆け抜けるぞ、ドーマ」

『クワッワァ!』

「はいよおっ!」

レオはドーマの並外れた跳躍でエリアを飛び越そうとするが

「させるかあああああっ!!」

進ませる訳にはいかないシンクとエクレ。レオとドーマの後を追いつ  
跳躍

レオは前を向いて後ろがから空気で絶好のチャンス

「ふっ」

「なっ!?!」

武器を振り下ろすもレオはドーマから降りてその攻撃を避ける

「でええいつ!!」

「うわあああっ!?!」

そのまま斧を取り出し反撃。その反撃に対応できなかった二人は直撃し吹き飛ばされる

「くつ　勇者、お前はなんなんだ！戦いの邪魔をしにきたのか？！」

「そつ、そつちこそ！僕の」

「「！？」」

言い争う二人だが、レオはそれを黙って見ているつもりはなかった斧を高々と振り上げ紋章が背後に浮かび上げフロニヤ力を集めるレオ

それは明らかに危険な雰囲気醸し出していた

「とうおおおおおりゃあ！！」

レオは斧を地面へと振り下ろす  
ガキーンと金属音とともに紋章が浮かび上がる

「獅子王炎陣」

レオの回りから火柱が上がり、空からは火の玉が降り注ぐ  
どんどんと敵味方関係なくやられていく

「紋章術ってこんなことまで」

「レオ姫のはケタが違う。倒されたくなければ」

「「とにかく逃げる」」

「大爆破ああっ!!」

ドガアアアアアアッ!!

「今の爆音          そこに向かえば何かわかるかも          」

場所は変わって森をさまようカイト

しかし、レオの紋章術『獅子王炎陣大爆破』の爆音を聞き、その方向へと歩き出していた

そのカイトの予想は当たり、人影を確認した

「あつ、あそこに人が          ！？」

悪寒を感じたカイトは咄嗟に右へと回避

すると、巨大な鉄球がカイトがさっきまでいた地面にめり込んだ

「ほう。ネズミがコソコソと動いてると思ったがなかなかやるようだな」

木の陰から現れたのはゴドウィン將軍

どうやらカイトがたどり着いたのはガレット獅子団の本陣だった

「えっと、いきなり危ないじゃないですか」

「コソコソと裏から攻撃を仕掛けようとしていた貴様に言われとうないわ」

「いや、僕はそんなつもりはなくて、ただここがどこなのかを訪ねよう」

「ふん！そんな見え透いた嘘だれが騙されるか、バカめ。貴様も戦に参加する戦士なら堂々と戦え」

どうやら完全に誤解されてしまっているカイト  
確かに本陣の後ろから現れた者を疑うのは当然ではある

「さあ、行くぞー!!」

「くっ」

ゴドウィンは鉄球を振り回し戦闘態勢に入る  
カイトも話し合いは難しいと判断し武器を構える

「ほう。隙のない良い構えだ。これはなかなか楽しめそうだ」

「僕は楽しめるとは思えないんだけどね」

「ガッハハハッ!! 改めて行くぞー!!」

カイト、異世界『フロニヤルド』での初戦闘が始まった

「ふん」

レオの紋章術『獅子王炎陣大爆破』にエリアはほぼ半壊  
回りは犬玉と猫玉が転がっている

「フランボワーズ！確認せい、勇者とタレ耳はちゃんと死んだか？」

『あー、はい！えーつとですネ』

フランボワーズが確認する中、空から声が聞こえた

「そう簡単にやられるかあ！！」

「にしても高すぎない？ねえ、これ高すぎない？！」

そこにはシンクとエクレがいた

エクレの機転で空へと回避したようだ

『だがこれでは、レオ閣下の的だぞ！！』

フランボワーズの言う通りレオは斧を構えシンクとエクレに狙いを定めている

だが、二人もそう簡単にやられる訳はなかった

「貴様と手柄を分けたくなどないが、二人でかからなければどうにもならん」

「えっ？」

「協力だ。さっきのタイミング、今度は外さん！」

「んっ！オーライ！」

「よし！行って」

エクレは空中で身体をひねらせ

「こおい!!」

ドゴンツと勇者を蹴り落とす

「ひでええええええええええっ!!??」

「ふっ!!」

待ち構えていたレオはシンクに斧を振るう  
シンクもすぐさま棒で勢いのまま叩きつける

「ぐっ」

衝撃波に弾かれるシンクだが、見事に着地。その間にエクレも着地。  
レオを挟む形となった

「むっ」

「はああああっ!!」

「たああああっ!!」

二人は同時に走り出す  
右からエクレ左からシンクが攻撃を仕掛けた

「なっ」

レオは斧と盾でなんとか防ぐもあまりの威力により破壊されてしまう



「はあああつー!!」

「りゃあああつー!!」

さすがのレオも武器無しではなすすべなく、シンクとエクレの左右からの攻撃が一閃

「!?!」

ピシッとレオの鎧がひび割れし破壊された

「あは　　むっ!?!」

レオに攻撃が当たり笑顔を見せたシンクだがレオの鎧が破壊されたことにより、露出した姿を見て強張ってしまう

「んむう　　チビとタレ耳相手と思うて少々侮ったか　このまま続けてやってもよいがそれではちと、両国民へのサービスが過ぎてしまうのお　　」

誰も認めるナイスボディにレオは見せつけるように言う

「レオ閣下、それでは　　」

「うむ、ワシはここで降参じゃ　　」

レオがそう言った瞬間、火花が上げられた  
回りにいる戦士たちも大騒ぎ

『まさか、まさかのレオ閣下敗北!!!総大将撃破ボーナス350点

「が加算されます！！」

加算されたことにビスコッティの戦士たちやミルヒたちは大喜び

「勇者よ。親衛隊長の助けがあつたとはいえ、ワシに一撃入れたことは褒めてやろう」

マイクを持ちながらシンクを褒めるレオ

「だが、今後も同じ活躍をできると思ふなよ」

レオはシンクにマイクを渡し、そこから立ち去る

「あ、ありがとうございます！姫さ」

ピンとレオの尻尾が立つ

「閣下」

「！ 閣下！！」

「うむ」

シンクが言い直すと満足げに笑うレオ

「閣下との戦い、怖がったけど楽しかったです！！」

「ふっ」

「「？」「」

ひよいひよいと尻尾でマイクをエクレに渡すように指示するレオ  
よくわからない表情をしていたが、シンクはエクレにマイクを投げ  
渡す

その瞬間、レオの目が鋭く光る

「撮影班、タレ耳によれ。良い絵が撮れるぞ」

回りにいた撮影班はレオの言う通りカメラをエクレへと向けた

ピリリッ！！

エクレの服が盛大に破れた  
全員がそんなエクレに大注目

「あ      あっ      」

なぜこうなったのか、エクレはあまりの事態に固まりながらも考えた  
「はっ!?!」

レオに一撃入れた場面がフラッシュバック  
シンクの棒が見事にレオの背中をとらえていたが長さまで計算できていなかったようで、エクレの服に直撃していた

「ああああああああああっ!?!?!」

『勇者、なんと自分騎士に誤爆!!防具破壊を越えて服まで破壊してしまいました!!!』

まわりの戦士たちがさらに大騒ぎ、いや大歓声

「      あらあら      」

城にいるミルヒもそんな光景に苦笑

「あはははっ また来るぞ」

『ここで、レオ閣下。堂々のご退場！これは次の　ん？』

フランボワーズが実況をしようとしたらあることに気づいた

『おおっと？！なにやら戦場が騒がしいぞ？両軍のポイントがぐんぐんと上がっている！！』

「えっ？」

「なに？」

フランボワーズの言葉にエクレに襲いかかっていたシンクと退場しようとしていたレオは得点板を見ると確かに両国の得点が凄い勢いで上がっていく

「フランボワーズ！これはどういうことだ！確認しろ！」

『ええっと、少々お待ちを　　おおっと！これは！？』

フランボワーズの驚きの声とともにモニターに映されたのはゴドウィンとカイトの姿だった

### EPISODE 3 『乱入者』

「ぶるああああっ!!」

「くっ!」

ゴドウインの斧がカイトを襲うが、すれすれで避ける

「はあっ!」

「おおっと」

カイトは素早い動きで攻撃しようとするが、ゴドウインは鎖鎌ならぬ鎖斧の先に付いた鉄球でカイトを寄せつけない

「これじゃあ近づけない」

「はああああっ!!」

鉄球に弾き飛ばされたカイトはどうするか考えていると、後ろからガレット獅子団の戦士が襲いかかる

「舞武!!」

しかしカイトは冷静に撃退。戦士を切り倒す

「やはりやるな、貴様。これほどの試合は久しぶりだ。うおおらああああっ!!」

「はあっ！！」

「「「ぎゃああああっ！？」」「」」

ゴドウインの鉄球を避けるカイト。だが、その鉄球が回りにいた両軍の戦士たちが次々とやられていく  
どうやら得点の増加はこの二人が原因のようだ

「ゴドウイン？あやつ一体なにを」

『情報によりますとガレット獅子団本陣の裏から現れたあの赤い服を来たビスコッティの戦士を撃退しているもよう』

「なんだ？なるほど、勇者を囿に我が本陣を狙う作戦だったのか」

「違います！！」

タオルを巻いて復活したエクレがレオの予測を否定する

「私たちはそんな卑劣な作戦を立てていません！」

『どうなのですか、ロラン殿』

実況席に座る解説のバナードがロランに訪ねる

「ええ、そんな作戦は我々は立てていません。それにあの赤い少年我々ビスコッティ騎士団にはいません」

「ほう。どうやらあやつは乱入者という訳か。面白い」

「レオ閣下？」

「タレ耳。マイクを」

「は、はい」

レオがマイクを受け取ると撮影班が注目する

『ゴドウィン！聞こえるか？』

「ん？」



「これは閣下。いかがなされた？」

レオの声に返事をするゴドウィン

『一体なにをしている。そんな奴さつさと倒さんか』

「ごあいにくですが、閣下。このビスコッティ騎士、なかなかの腕前でしてな」

（閣下？あの人か？）

モニターに映る閣下と呼ばれたレオを見て意外そうに見るカイト

『そうかそうか。お前にそこまで言わせる奴か』

「閣下こそ、勇者にやられてしまったご様子」

『ワシのことはいい。それとそやつはビスコッティの者ではないらしい。どうやら乱入者のようだ』

「ほう」

（あれ？なんか嫌な予感がする）

不適に笑うレオとゴドウィンを見て悪寒を感じるカイト

『皆の者、聞くがよい！！そこにいる赤い服の少年は乱入者だ！その乱入者を倒した国には400ポイント』

「えっ？」

『倒した者には特別ボーナスをくれてやろう!!』

「うおおおおおおおおおっ!!!!!!」

「えっ？」

大盛り上がりの戦士たちに未だに状況が理解できていないカイト

「なるほど、お前の言う通りだったようだな」

「わかつてくれたのでしたら、この戦いは止めに」

「残念ながら閣下がお前を『乱入者』という扱いをされてしまった時点でお前はこの戦の参加者となった」

「え、ええっ！？僕が乱入者？」

「止めたいのなら やられるか、逃げるか、我々を全員倒すかだ。皆の者、かかれえい!!」

「うおおおおおおおっ!!」

「ええええええええええええええっ!!??」

「喰らえ！」

「うわっ！」

「特別ボーナスは俺のもんだ！」

「くっ！」

「死にやがれ！！！」

「酷い！？」

『乱入者』扱いとされたカイトはビスコッティ・ガレット両軍の戦士から集中攻撃されている

「虎輪刃！！！」

「くくくあああああっ！？」「くくく」

しかし、カイトもやられる訳にはいかず、必死に反撃  
次々と戦士たちを倒していく

「やはり一般戦士では相手にならんようだな。ここはもう一戦とい  
こうか、少年！！！」

「ぐっ」

ドガンと鉄球をふるってくるゴドウィン

「閣下がやられてしまつて我が軍は負けが決まつたとばかり思ったが、貴様のおかげで逆転のチャンスができた。感謝するぞ」

「残念だけどそう簡単にやられるつもりはないよ」

「ふつ　ぬおりゃあああつ!!」

（この人の攻撃は攻守一体。攻めながら自分の身を守る戦い方）

「なら!!」

「何を閃いたかは知らんがこのゴドウィン將軍に勝てると思うな!!」

鉄球を投げるゴドウィン

「」

さつきまでは避けていたカイトだが、双剣に力を込める

「むっ! 蒼い炎?」

カイトの手から現れた蒼い炎に目がいくゴドウィン  
蒼炎はそのままカイトの双剣を纏う

「三爪炎痕!!」

カイトの得意技『三爪炎痕』を発動

素早い動きで三つの斬撃を放つ強烈な技

だがそれだけでは終わらず、三撃目を放った瞬間、蒼い三爪の形をしたエネルギーが放出された

鉄球など粉々に破壊し、その放出されたエネルギーは真っ直ぐゴドウィンに

「これは紋章砲！？しまっ

」

「「「ぎゃああああっ！？」「」」

予想外な攻撃に反応が遅れたゴドウィンは直撃

2m近くあるゴドウィンの身体が吹き飛ばされる

その直線上にいた戦士たちも巻き込まれ吹き飛ばされてしまう

「今のは

」

自分の放った攻撃がまさかここまでの威力があるとは思わなかった  
カイト

それに、あれはそんなに力を入れてはいない

もし全力でやったらどうなってしまうのだろうか

「グフッ

まさか、こんな切り札を持っていたとは油断した

」

「あつ、だ、大丈夫ですか？！」

むくつと上半身だけ起きるゴドウィン。着ていた鎧も三爪の痕がくつきり残っている

「ふん！こんなことでくたばる俺様ではない。だが、身体が動かん。俺はここらで降参しよう」

『なんと、なんとあのゴドウィン將軍が乱入者に敗れた。なんという強さなんだ、あの乱入者は！？』

「貴様、名をなんと言っ？」

「カイト」

「ふっ、カイト。次、やり合つとき勝つのはこのゴドウィン將軍だ。覚えておけ！」

やられたのに妙に嬉しそうなゴドウィン  
ライバル強敵が現れたことに喜びを感じているのかもしれない

「おいおい　あのゴドウィン將軍が勝った奴にどう戦えばいいんだよ」

「俺たちじゃ束になつても勝てねえぞ」

「あの乱入者は何者なんだ？」

ざわざわと騒ぎ出す戦士たち。カイトの強さに怖じ気づいたのだろう  
これで無駄な戦いをしなくて済む、そう思ったのだが

「次は僕が相手だ！！」

声が出た方を見るとそこにはやる気満々のシンクがいた

『あのゴドウィン將軍が敗れ、続いて挑戦するのは勇者シンクだ！』

これは見逃せない対戦だ!!」

実況を聞いたカイトはがくりと俯いた  
正直、これ以上戦うのは嫌なカイト

「あの勇者さん。僕」

「いざ尋常に勝負勝負!!」

逆にやる気満々なシンク

これはゴドウィンと同じで話し合いは難しいかもしれない

シンクはこれも戦のイベントの一つであると考えているのだろう

「わかったよ　こうなったらタイムアップまで逃げきるしかない」

タイムアップまで残り何分あるかわからないが覚悟を決めるカイト

「いきます!!」

「来い!」

ガキインとカイトとシンクの武器がぶつかり合う  
二人の勇者の戦いが始まった

## EPISODE 4 『勇者対乱入者?』

「たっ! やっ! ほっ!」

「ふっ! すっ! はっ!」

「『『すげー

』』」

二人の攻防に思わず見とれてしまう両軍の戦士たち

シンクの多彩な棒術でカイトを攻めるがカイトは上手く受け流す  
カイトは武器のリーチの差を埋める踏み込みの速さで攻めるがシン  
クの高い動体視力で防ぐ

「勇者殿も凄かったがその勇者殿と互角に戦うあの少年は一体何者  
なんだ」

「兄様、私が確認に行ってきます」

ロランに持ってきてもらった服を着替え終わったエクレ



「そうだな。せっかく勇者殿とお前が勝ち取ったポイントを無駄にするわけにはいかない。頼んだぞ、エクレ」

「はい、行つてきます！」

「ほう、なかなかやりやるのお」

「そうですね。まさかゴドウィン將軍が負けてしまうとは思いませんでした」

レオと一緒にモニターを見るこの女性は『ビオレ』  
さっきまで実況席でゲスト解説をしていた

「勇者といい、あの少年といい。実に面白い。どれワシも直に見に行こうかの」

「レオ様は降伏されているのですから決して戦に参加してはいけませんよ？」

さっそうと愛騎ドーマに乗ったレオに忠告するビオレ

「わかっておる。それではドーマ行くぞ！はいよおっ！」

『クワアッ！！』

「あわわわ！？大変なことになってしまいましたね、リコッタ！」

「落ち着いて下さい、姫様。確かに乱入者なんて驚きましたですが昔は結構あったみたいですし」

乱入者という突然の事態にあたふたするミルヒをビスコッティ王立研究員主席リコッタ・エルマールが落ち着かせる

「でもでも、あの人勇者様と互角に戦っているのですよ？それにあのゴドウィン將軍まで倒して」

「大丈夫でありますよ。今、ロラン様からエクレを勇者様の元へと向かわせたと連絡がきましたし、信じましょう」

「はい」

ミルヒは両手を抱きながらシンクの無事を願う

「舞武！」

「うわっ!？」

カイトの連続攻撃がシンクを弾き飛ばす

これも経験の差なのかカイトがじわじわとシンクを追い詰めている

「凄く強い　でも、楽しい!!」

ガバツと起きあがるシンクは棒を再び構えやる気満々

「乱入者さん、僕今、とっても楽しいです!!」

「　それは良かった　実況の人！聞こえますか？」

『はいはい！なんでしょう？』

「この戦はいつ終わるのか知りたいんですけど？」

『えつと残り30分です。この乱入者はどうやらタイムアップを狙っているようだ!!回りにいる戦士のみなさん。このままでは特別ボーナスがもらえませんか?』

「そうだ、ボーナス！」

「乱入者を倒さないとあの乱入者がボーナスを独り占めになるぞ」  
「つかさ。今、戦って疲れている勇者を倒した方がよくね？」

「  
」  
それだ！！」

「うえっ！？僕？！」

標的が乱入者<sup>カイト</sup>から勇者<sup>シンク</sup>へと変わってしまう

「半分は勇者で残りの半分は乱入者を攻撃するぞ！！」

残念ながら全員という訳にはいかないようだ

「くっ  
」  
！？」

「裂空十文字!!」

「うわっ!？」

「えっちよっ!？」

いきなり遠くの方から飛んできた紋章砲にカイトとシンクは横に跳んだ

「「ぎゃああああっ!!?？」」

その直線上にいた戦士たちは残念ながら直撃しやられてしまう

「ちっ、外したか」

「ちょっとエクレ!今の僕にも当たるところだったんだけど!!」

「当然だ。当てるつもりだったのだからな」

「酷い!？」

「 今の攻撃は 」

紋章砲を知らないカイトは少し啞然とする

あんな技は『The World』にはないのだから仕方ない  
だが、そのおかげで一つの結論が出た

「ここはThe Worldじゃない まったく別の世界  
」

そうではないかと思っではいたが、いざそうだと分かるとショック  
が大きい

（ 落ち込むのは後だ。今はこの事態を乗り切ろう。そうすれ  
ばいろいろな情報が手に入る ）

そうと決まれば、残り30分。やれることは三つ  
わざとやられるか、タイムアップまで逃げ切るか  
そして

ボオワッ！！

立ち向かう者を全員を倒す、それがカイトの出した答えだった

「蒼い炎?!」

「勇者、逃げるぞ!!」

カイトの蒼炎がさらに燃え上がる  
シンクとエクレはすぐに逃げる

「三爪炎痕!!」

ドオオオオオオオオオオンッ!!!!!!!!!!

「これは」

カイトの三爪炎痕の威力にシンクは啞然とする  
その威力は浮島を粉々にするほどの威力だった

「まるでレオ閣下と同じレベルの紋章砲だ」

「」

「あれ？乱入者さん？」

カイトの様子がおかしい  
ふらふらと上体を揺らし始める

「あ　う　？」

「ええっ！？乱入者さん！？」

ドサッとカイトは倒れてしまった  
シンクは急いでカイトの元へと向かう



「　　どうやらフロニヤ力を使い過ぎたようだな　　まったく  
凄いのかバカなのか　　まるでどこかの誰かさんみたいだ」

「そこで何で僕を睨みつけるのさ　　」

「ふん！とりあえずこの乱入者のポイントはどうなるのだ？」

「残念だが無効であろう」

倒れるカイトではなくポイントを心配するエクレ  
そのことについては到着したレオが答える

「ではこの乱入者はどうします？」

「そのものはワシに預からせてもらおう。いろいろ聞きたいことがあるからのう」

「わかりました。おい、勇者。我々は戦に戻るぞ」

「う、うん！」

シンクとエクレは走って戦場へと戻った  
それを見送ったレオは倒れるカイトに視線を向けた

「それでお主はいつまで寝ているつもりか？」

「　　バレてましたか　　」

むくりと倒れていたカイトが起きあがる

「ふつ、気絶したフリをして事を済まそうとはなかなか頭が回るではないか」

「いや、実際に倒れたのは本当ですよ。技を繰り出した瞬間、立ち眩みがして」

「あれほどの力を使えば当然であろう。それでお主は一体どこの国の者なのだ？それほどの実力、よほどの名の通る騎士なのでであろう？」

「いや、僕は多分、この世界の人間ではないと思います」

「ほう      詳しく聞かせてもらおう      」

少し驚いた表情を見せたレオだったが、すぐに真剣な顔へと変わる

「ここではなんだ。場所を変えましょう。お主は名はなんと？」

「はい、カイトと言います」

「そうか。カイト、乗るがよい」

レオはドーマを座らせ、カイトが乗りやすいようにする

「うん。でもその前に      」

カイトは上着を脱ぎ、その上着をレオに渡す

「その格好じゃ風邪引くよ。だからこれを」

「ほう　　すまぬな　　」

「いえ、このくらい当然です」

そう言つとカイトはレオの後ろに座る

「振り落とされぬようしっかり掴まっておけ。行くぞ、ドーマー！」

『クワツワア！！』

鳴き声と同時に風のように駆けるドーマ

そんな中、カイトは考えていた

（僕がどうしてこの世界に飛ばされたのか。わからないことが、たくさんあるけど何か意味があるはず）

ふと戦場の方へと視線を向ける

（その意味を見つけ出してThe Worldに帰るんだ）

そう決意するカイトであつた

カイトが異世界フロニヤルドに飛ばされた意味とは  
それは誰にもわからない

## EPISODE 5 『新たな勇者誕生！そして新たな戦い』

「つまりお主は勇者がいた世界の『ねつとげーむ』とやらの中にいた者である？」

レオに自分のことを話したカイト。だが、レオはよくわかっていない。そもそもネットゲームのことすらわかっていない。

「わかりやすく例えるなら童話の中にいた人物が飛び出てきた、というのでしょうか？」

「あ、はい。それでいいと思います」

「なるほどのう。で、どうするのだ？」

「何がですか？」

「カイトは元にくいた世界に帰りたいのだろうか？しかし、先ほど言ったが今のところ帰る方法はない」

そう、帰る方法はない。

だが、それを聞いてカイトは落ち込んだりはしなかった。

「『今のところ』ですよ。なら可能性はまだ残ってる。残ってるなら僕は諦めません」

「ふふつ、ならばカイトよ。お主、我がガレット獅子団に入らぬか？」

「えっ？」

「探すと言ってもその間寝泊まりする場所が必要だろう。それに帰る方法探しも我々ができる限り協力しよう」

「それな願ったり叶ったりですが　でも、良いんですか？」

「構わん。その変わりに我がガレット獅子団の勇者として働いてもらうからな」

「ゆ、勇者ですか　」

勇者という言葉に表情が引きつるカイト

「お主の実力なら誰でも納得だろう。ビオレもそう思うだろ」

「はい、もちろんです」

あの戦を見ていれば誰でも納得してしまうかもしれない

「　わかりました。僕は勇者としてレオ閣下の下に使わせてもらいます」

「うむ。では改めて名乗ろう。ワシはガレット獅子団領国王レオン・ミシエリ・ガレット・デ・ロワ。勇者、お主の名は？」

「僕は異世界から着ました。名はカイト。『黄昏の騎士団長』または『蒼炎の騎士』」

カイトはThe Worldで他のプレイヤーから付けられた二つ

名を名乗る

二つ名があつた方が勇者っぽいと考えたのだ

「この二つ名に賭けて僕は勇者としてレオンミシエリ閣下とガレット獅子団領国の民を守ることを誓う！！」

カイトは双剣を掲げてレオに違いの言葉を述べた

これはカイトなりの覚悟

本物の勇者ではないけれどできることは全力でやる。それがカイトの覚悟

「はっはっはっ！！『黄昏の騎士団長』に『蒼炎の騎士』か。なるほど、ワシの『百獣王の騎士』と並び立つに相応しい二つ名ではないか」

カイトの覚悟と誓いが嬉しいのかレオは上機嫌である

「それに黄昏の騎士団というのも気になる。教えてもらえるか」

「ええ、構いませんよ」

「お待ちください、レオ様」

カイトが話そうとしたらビオレが止める

「もうすぐミルヒオーレ様のコンサートが始まりますが伺わなくてよろしいので？」

「だれが行くか。犬姫の歌など聞きとらないわ」

「そうですか」

「そんなことよりビオレ、酒を持ってきてくれ。カイトの話を肴にして呑むぞ」

「わかりました」

ビオレは酒を取りに行くため外に出ようとするが

「あつ、僕も手伝いますよ」

「えっ？でも」

「気にしないで下さい。ほら行きましょう」

「え、あの、ちょっと？」

カイトはビオレの背中を押しながら外に出た

「あの　　勇者様　　？」

「すみません。少し聞きたいことがあります。あと、僕のことカイトと呼んでください」

「わかりました。でしたら私のことはビオレとお呼び下さい。それでカイト様、聞きたいことは？」

様付けも止めて欲しかったが、それは今度言うことにしてカイトは本題にはいる

「レオ閣下とビスコッティの姫様のことなんですが 何であんなに仲が悪いんですか？」

「昔はもっと仲が良かったのですよ。それもまるで姉妹のよう」

「そんなレオ閣下がどうして姫様のコンサートを聞きに行きたくないのでしょうか」

「わかりません。レオ様が変わってしまったのは最近のことなのですが」

「そうですか。ありがとうございます、ビオレさん。それじゃあそろそろ行きましょう。レオ閣下が待ちくたびれてしまいます」

そう言うとな人数分のコップと酒を持ったカイトは歩き出す

「カイト様」

そんなカイトにビオレが呼び止める

「はい？」

「どうしてそんなことを聞くのです？」

「さっき、コンサートの話をしたときレオ閣下の表情が曇っていましたから。気になって それに僕は誓いましたから」

「『レオ様と民を守る』ですか？それは戦だけの話では？」



ビオレの質問にカイトは首を傾げた

「僕は戦だけじゃなく、いろんなことで力になれる勇者になるんだ」

「それはレオ様だから？」

「違います。レオ閣下だけじゃなくガレット獅子団領国の戦士や民の皆さん、ビオレさん　みんなの勇者になる」

カイトは真っ直ぐな視線を夜空に向けながら答える

「そうですか　」

カイトの答えにビオレはいつもの笑顔でそう言った

「やっと来たか待ちくたびれたぞ」

「申し訳ありません。少々、探すのに手こずりまして」

適当な嘘をつきビオレはレオに酒をつぐ

「それでは私はこれで」

「むっ？一緒に飲まんのか？」

「少し用がありますので。お二人でごゆっくり。あっ、それと」

頭を下げたビオレは入り口前で振り返る

「カイト様は素晴らしい勇者様になられると思いますよ」

そう言ってビオレは出て行った

「はははっ！そうじゃろそうじゃろ！それではカイト、さっそくお主がいた世界について話してもらおう！」

「はい、喜んで」

カイトはレオの酒の肴に自分の話を語るのであった

その頃の勇者シンクは、元居た世界地球に帰れないことを知り、とりあえず家族や友達に連絡しようとりコッタの力を借りて、無事成功

今はその帰りである

「姫様のコンサートに汗臭い姿で来られても困る。コンサート前に風呂を使ってこい」

「風呂つてどこで？」

「案内図もありますし、中の人間に聞けばわかるでありますよ」

「ふうん　わかった。そうするよ　それにしてもあの乱入者とても強かったなあ」

カイトとの戦闘を思い出すシンクは楽しそうな笑みを浮かべる

「まあ、貴様と同じアホだが実力は確かだな」

「空島を破壊してしまうほどの紋章砲を使っていたでありますしね」

「あー！思い出したらまた戦いたくなってきたよ！！でも、このままじゃ勝てない。だからレッツ猛特訓！！」

「張り切るのは構わんが、まずは姫様のコンサートだ。貴様はとつとと風呂に入つてこい」

「了解。行つてきます」

そう言つてシンクはエクレ、リコッタと別れ風呂場に向かうのだが

「って 誰も居ないんだけど、みんなコンサートの準備で忙しいのかな？っていうか風呂場ってどこ？」

一人寂しく歩くシンク

ずっと探しているがシンクの言う通り誰もいないため場所を聞くこともできないためさ迷っていた

「あつ、あそこかな？」

シンクが目に行ったのは明かりがついた大きな建物  
駆け足でそこに向かって仲を確認してみる

「あつ！ロッカー！」

そこには脱衣所に置かれるようなロッカーを発見する

「イエスッ！大正解！」

シンクはすぐに服を脱いで風呂場へと直行した  
だが、シンクは気づかなかった。貼られてあった貼り紙に

「うわあ、スッゴいや！露天だあ！」

星空輝く露天風呂に感動するシンク

しかも、かなりの広さで大浴場である

感動していると、バシャアンと水の音が聞こえる

「あれ？先客さんかな？」

シンクは湯気でよく見えずその音がした方向に向かうが

「っ！？」

「あつ、勇者様？」

ピンク色の犬耳と尻尾。そして聞き覚えのある声  
それは間違いなくミルヒであった

「」

「」

しばらく続く沈黙

シンクの持っていた桶が落ちた瞬間、二人は正気に戻った

「はっ！きゃあああっ！？」

「あああああっ！？見てません！なにも見てません！！」

顔を真っ赤にして叫ぶ二人

シンクは本当に見ていないのか気になるところでもある

「す、すみません。勇者様の前でこんなはしたない」

「ああつ、いやつ、あの僕、人がいるとか、まさかあの、その姫様が  
がいるとは思わなくてすみませんすみま」

ザボンツと落ちた桶を踏み態勢を崩し風呂へと落ちる

「ごめんなさい。私、普段こちらの大浴場にはなかなか入れないもので  
ですからこんな時くらいは、って」

とにかくミルヒはタオルを巻いてくれと心から思うシンクはお湯の中  
へと潜ってしまう

中学生にはこの刺激はまだツライ

「あ、あの私、もう上がりますので、勇者様はどうぞゆっくり」

タツタツと走り去るミルヒ

「ぶはあっ!」

息切れで湯から出るシンク

回りを見渡すとあるのはタオルのみ

まずいことをしたなと頬をかくシンク

「あの、勇者様?」

「は、はい!」

声が裏返しながら返事をしたシンクは振り返るとそこにはちゃんと  
タオルを巻いたミルヒがいた

「召還のこととか、これからのこととか、勇者様にお話ししたいこ

といっぱいあるんです。ですからコンサートが終わったら少しお時間いただけますか？」

「あ、あつ、はい！それはもちろん！」

「ありがとうございます。ではまた後ほど」

「はい      はあ      」

ミルヒは笑顔で出て行ったのを見てシンクはホッと一息した  
そこでシンクはあることに気づいた

「      姫様に聞けば良かった      まさかここ、女湯じゃ

」

残念ながらこの大浴場は時間交代制であり、今の時間は女性の時間  
だった

その貼り紙が貼ってあったのだが、残念なことにシンクはこの世界の  
字は読めなかった

だが、その紙に『ミルヒオーレが使わせてもらっています』と可愛い  
イラスト付きの紙も貼ってあった。それに気づいていればこの事  
態は回避できたかもしれない

「      ないよね      」

ふうと大浴場の湯を堪能していると

「きゃああああああつ!!??」

ガシャーンと何かが割れる音と一緒にミルヒの叫び声が響き渡った

「姫様!!」

急いでシンクは風呂から上がり着替えて外に出るのだった



「ほう！カイトはいろいろな冒険をしてきたのだな」

「うん。それにたくさんの友達や仲間も出来たんだ」

カイトの話に盛り上がる二人

「カイトの話は面白いのう。酒が進む」

「それは良かった」

いつの間にかカイトはレオに対して敬語ではなくなっていた  
ずいぶんこの短時間で仲良くなったものである

「それでね。ミアがぴろしに」

「レオ様、失礼します」

カイトが話を続けようとしたがビオレが少し慌てた様子で入ってきた

「なんじゃ？せっかく良いところじゃったのに」

「緊急事態です。ガウル様が」

「なに」

「？」

険しい表情をするレオ。カイトはよくわからないといった顔である

「今、放送されている映像をご覧ください」

レオとカイトはビオレの言われた通り映像を見る

「むう！むう！」

建物の上にいたのは縛られているミルヒ  
そして

「我らガレット獅子団領」

「ガウル様直属秘密諜報部隊」

「『ジエノワーズ！』」

ライトアップに爆発と過激に名乗る三人

「姫様！！」

そして三人を睨みつけるシンク

「ビスコッティの勇者殿、あなたの大事な姫様は我々が攫わせてい

たきます」

この映像はあちこちに放送されており、見ている民たちは大盛り上がり

「うちらはミオン砦で待つてるからなあ！」

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けに来られますか？」

それを見ていたエクレヤリコツタも呆然としている

「つまり大陸協定に基づいて『要人誘拐奪還戦』を開催させていた  
だきたと思います」

そう言う映像がミオン砦へと変わる

「こちらの兵力は二百。ガウル様直下の精鋭部隊」

「で、ガウル様は勇者様の一騎打ちをご所望です」

「勇者さんが断ったら姫様がどうなるか」

「むう！むう！」

俯くシンクは答える

「受けて立つに決まってる！！僕は姫様に喚んでもらった。ビスコ  
ッティの勇者シンクだ！どこの誰とだって戦ってやる！！」

シンクは勇者に相応しい言葉で戦の申し出を受けたのであった

「あらあら

勇者様受けてしまわれましたね

」

「あのバカ共が――！一体、何を考えておる――！勇者も戦の申し出を受けおつて

」

「えっ？どういうこと？あれは受けざるおえないと思うけど」

「カイト様は知らないのでしたね。宣戦布告の仕組みを」

「仕組み？」

「はい。宣戦布告を受けるということは公式の戦と認めたことになるのです」

「ということは勇者さんが受けていなければ

」

「犬姫は無事に解放され、コンサートも行っことが出来たものを

あのへっばこ勇者が安易に請け負った」

ちなみにそのへっばこ勇者は

「この、ドアホうが!！」

「ああああああっ!!!!??」

エクレに跳び蹴りを喰らっていたりした

「まあ、知らなかったとは言え勇者さんの気持ちはわかるよ」

「なに？」

「悪者に攫われた姫を助けるのが勇者の運命。<sup>さため</sup>ビスコッティの勇者さんは本当に良い勇者みたい」

「ふん。どうでもよい。さっさとあのガキ共を止めに行く。ビオレ、鎧を」

「はい、かしこまりました」

ビオレはレオの鎧を準備するため出て行った

「まったく」

「あのさ、レオ閣下」

ため息をつくレオにカイトが話しかける

「なんじゃ？」

「その止めに行くの僕も参加していいかな？ガレット獅子団領の勇者として、ね」

## EPISODE『開始！姫奪還戦！』

ここはミオン砦

そこには二百の兵がシンク達を待ち構えていた

その中にはゴドウィン將軍と銀髪の少年がいた

「いやあ、ガウル殿下にご指名いただき、このゴドウィン。光栄でありますぞ」

「うっはははっ！いやあ、お前も今日の様子じゃ暴れたりねえだろうと思つてよ」

この少年は、ガウル・ガレット・デ・ロワ。レオの弟である

「いやあ、まったく。砦攻めも悪くはありませんがやはり自分ばかり、野戦が得意でありますゆえ」

「おう、がつつり暴れてくれや。まあ、お前も飲め、食え！」

「はっ。では遠慮なく。おっ、そういえばミルヒオーレ姫は今」

「ルージュに任せてあるよ。接待態勢は万全さ」

「なるほど」

「後はまあ、俺のほうでもちよいと思つところがあつてなあ」

「？」

ガブリと肉にかぶりつくガウル

「それよりもお前のその鎧。どうした？」

「これですか？こいつは前回の戦に現れた乱入者により付けられ傷であります」

ゴドウインの話にガウルの耳と尻尾が立つ

「乱入者？珍しい      それにお前にそれほどのダメージを与えられる実力者か      そいつにも会ってみてえな。その乱入者はどうした？」

「はっ。レオンミシエリ閣下と共にいます」

「姉上と？それなら後で会えっか」

その乱入者とは早い形で会うつことになるのだがまだガウルは知らない

その頃外では



「本隊を待ちたいが待っている時間はどこにもない」

「おう！」

セルクルに乗ってミオン砦に向かうシンクとエクレ

「ガウル殿下の兵は悔しいが精鋭だ。野戦であの数を相手にするのはぶっちゃけ厳しい」

「うん！」

「だが、かつての大戦では、千を超える騎兵隊を切り抜け、見事に一騎掛けで敵将までたどり着いた伝説の騎士だって存在した」

「マジで！」

エクレの話に驚くシンク

普通ならありえないが確かにその話は存在する

「それを思えば我々として、百騎やそこらの相手など！」

「おう！リコのサポートだってあるんだし」

「「やってやれないことはない！！！」」

同時に武器を構えるシンクとエクレ

「やらねば時間に間に合わん！」



何か放たれた音が響く  
見るとピンク色の塊が降ってきた

ヒュウ~~~~~ドガン!!

「「「ギアアアアアッ!!」「」」

そのピンク色の塊に精鋭部隊が吹き飛ばされる

「ほ、砲撃! 砲撃いい!?!」

「まさか、砲兵がいるのか!?!」

そう、これは砲弾

その砲弾を撃ち放たれているのは近くにある林の中

「いますでありますよ～～！！ビスコッティ学術研究員主席リコッタ・エルマール！！」

そついうと置いた砲台からピンク色の砲弾が込められる

「戦場では砲術士をやらせていただいております」  
指を鳴らすと砲弾が撃ち放たれる

「「はあああああつ！！」」

そんなリコッタの援護もあってシンクとエクレはミオン砦へと駆け抜けて行く

「あつはははっ！これは凄い！」

そんな戦場を遠くから観戦する二人の女性がいた

「暗がり故、誰が誰やらわかんが若い騎士達が頑張っているよう  
でいれる」

「ですが、お館様。ビスコッティとガレットの戦のようですから我々も加勢をするべきでは」

「若者同士、楽しく戦をしているのでござろう。大人が邪魔をするのも無粋でござるよ。拙者はのんびり見物をさせてもらうでござる」

そう言つて酒を飲む女性

この二人は一体何者だろうか

場所は変わつてココナ広場

そこにはガレット獅子団の本拠地

弟のガウルの戦に怒り心頭のレオは防具を付けている

「ガウルの奴、勝手に誘拐などしおつてからに」

「ルージュがちゃんと側にいたはずなんですけど  
殿下のお  
いたのようですね。申し訳ないです」

「国家と領主の経力をガキの遊びで乱されてたまるかー!」

「そついえばカイト様のお姿がお見えにならないのですが？」

「カイトなら先に向かった。ガレットの勇者としてな」

怒りの表情をしていたレオだが、そのときは少し笑顔を見せていた

「えっ？でも」

「なんじゃ？場所なら教えたぞ」

「いえ、カイト様は何でミオン砦へ向かったのでしょうか？」

「むっ？セルクルで向かったのじゃろ？」

「先ほど確認しましたがセルクルを使った形跡はありません」

「なんじゃと？では、カイトはどこに？」

その頃のカイトはというと

「うーんともう少しかな」

走っていた

バカみたいな話だが事実であり、ものすごい速さで駆けていく

「あつ、見えてきた！」

カイトの目の先にはミオン砦が見えた

「ん？なんで花火が上がっているんだろう？」

パンパンと鳴り響くのは花火の音

戦が終わったのかとも思ったが、金属音と人の叫び声が聞こえてきたため終わっていないことがわかりスピードを上げる

「正門は開いてないか」

破ろうと思えば破れるが勇者としてその参上はいかなものかと考える

「だったら飛び越える！」

カイトは足に力を込めてジャンプ。正門を飛び越えた

「これは」

カイトが見た光景は二百もいたはずの精鋭部隊が全滅  
そして広場の真ん中には背の高い女性とゴドウィンがいた

「むっ？お主は？」

「貴様はカイト！？どうしてここに？！」

「この戦を終わらせに来ました」

「なに？」

カイトの言葉にゴドウィンは目を細め睨みつける

カイトは気にせず双剣を抜いて宣言した

「僕はレオ閣下の命により、ガレット獅子団領の勇者となりました！勇者カイトです！！よろしく願います！」

「貴様が我が国の勇者だと！？」

「はい！説明は今、向かってくるであろうレオ閣下に聞いて下さい。それより僕はレオ閣下に命じられた任務をしないといけないんで」

「ほう？その任務とは何でござるっ？」

「それは」

カイトが話そうとした次の瞬間

ガキーン！



いきなりカイトの背後から現れた女性が短剣で斬りつける  
だが、カイトは双剣でそれを受け流す

「今のは危なかったよ。凄い速さだったよ」

「それを受け流したお主が言っても説得力がありませんよ」

「君は？」

「拙者はビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネトーネに  
ござる。背後から不意打ち申し訳ないでござる」

「構いませんよ。でも出来れば通らせて欲しいです」

「それは無理な相談でござる」

「そつだよね。でも通らせてもらつよ」

カイトは城に向かって走り出す  
それを黙って通す訳もなくユキカゼが先回りする

「紋章拳！」

ユキカゼの身体から黄色いフロニヤ力を纏う  
そして目にも止まらぬ踏み込みで接近する

「ユキカゼ流体術！」

「喰らわないよ！」

カイトも負けじと自慢の踏み込みの速さを見せ、ユキカゼを抜き去る  
そのまま城に向かうが

「させぬでござるよ、ガレットの勇者殿」

「くつ      あなたは？」

「ビスコッティ騎士団自由騎士隠密部隊統領ブリオツシュ・ダルキ  
アン。よろしくでござる」

「ブリオツシュさんですか。あなたも邪魔しますか」

「まあ、そうなるでござるよ。あと、先ほどおっしゃっておったレ  
才姫に命じられた任務とは何かを聞きたいでござるしな」

「簡単な話ですよ。この戦を起こしたガウル殿下とジェノワーズの  
みんなを懲らしめてこいって」

「なるほどなるほど。でもまあ」

ブリオツシュは刀剣をカイトに向ける

「拙者は若者たちの殿を務めているでござるゆえ。通すわけには  
」

「ぬおりゃあああああつ!!」

ブリオツシュが話している途中、ゴドウィンが鉄球を二人の間に投げつけた

「ゴドウィン將軍!」

「行け、カイト。閣下の御命令なのだろう。ここは任せろ」

「すみません、ありがとうございます!」

カイトはゴドウィンに礼を言い、城に向かう。それを追おうとユキカゼが行動しようとするが

「よい、ユキカゼ。行かせてあげるでござる」

「良いのですか、お館様?」

「うむ。追ってもユキカゼでは少々相手が悪いでござるつ」

「うつ、確かに  
」

「ダルキアン卿、ユツキー!!敵、増援であります!!」

双眼鏡で遠くを見ているリコッタが二人に向かって報告する

「数は?」

「それが      レオ閣下一騎掛けであります!!」

戦を治める戦乙女がもうすぐ到着する

## EPISODE 7 『協力戦!!』

ブリオツシュ、ユキカゼの力を借りてガウルの元へとたどり着いたシンクは、そのガウルと戦闘を開始していた

「良いねえ          十分客を呼べる腕前だ」

二人の力はまさに互角。だがまだガウルに余裕があった

「だが、もうちつと派手な技が欲しいとこだな。俺らの戦は見せてなんぼの代物だ」

そついうとガウルから紋章が現れる

「強さと華麗さ、豪快さ。その辺が騎士と戦士の必須事項！そのための力がこの気力だ!!」

紋章術とはまた違う気力を使った術  
ガウルの両手両足に気力で創られた鋭い爪が現れる

「気力解放! 『獅子王爪牙』!!」

ガウルが飛び上がりシンクを襲う

「くっ!!」

「どうおりゃあああああつ!!」

シンクはガウルの猛攻を紙一重で防ぐもシンクの棒に対しガウルは

両爪。手数はガウルの方が上であるためシンクは防戦一方

「天雷」

ガウルは気弾をシンクに放ち上空へと浮かす

ガウルの追撃にシンクは籠手で防ぐも破壊されてしまう  
まだ、ガウルの攻撃は終わらない

紋章を利用しその勢いでガウルはシンクへと襲いかかる

「爆砕陣！！」

ガウルの蹴りがシンクに決まりそのまま地面へと叩きつける  
だが

「あれ？」

そのまま勢いあまってシンクを引きずりながら壁へと激突した

「ぐうお、があっ      ！？」

顔面にぶつかったのか顔を押さえて痛がるガウル  
でもすぐに立ち上がり笑い出す

「どうよ！『獅子王爪牙』からの『天雷爆砕陣』！！街じゃ噂の気  
力系必殺技だ。ふっ、終わったな」

格好つけているが鼻血が出ているせいで決まっていな。そして戦  
闘も決まっていなかった

「勝手に終わらすな！！」

ドガンと瓦礫に埋まっていたシンクが元氣良く登場

「あ、あれ？いや、今は普通に終わりだろう！」

そんなシンクにガウルは驚愕の表情をしている

「何で立ってんだ、てめえ。化け物か？化け物なのか！？  
ん？」

シンクの身体をじろじろと観察するガウル  
そしてあることに気づいた。それはシンクの武器の先端がボコボコにへこんでいた

そう、シンクはあの攻撃の最中、武器を使って防御・受け身をして  
いたのだ

（こいつ、あの一瞬でそんな防御を）

シンクの動きに感心するガウルなのだが

ブシュッ！

「「やっぱり効いてた!?!」」

頭から血が噴出するシンク

さすがに全ての衝撃を受け流すことは出来なかったようだ

「どうしようどうしよう!?!」

「ああ、バカ!お前!」

痛みに駆け回るシンクに、それを追いかけるガウル  
この二人真面目なのかそうじゃないのかわからない

「くっ

」



場所は変わって、城の外

エクレは今、ミルヒを誘拐したジェノワーズの三人と戦っていた  
さすがのエクレでも三人相手では苦戦を強いられている

（ガウル殿下の副使ジェノワーズ。基本的には三人ともバカで間違  
いないが 戦いとなればやはり強い ）」

「ほらほら、休んでないでどんどん行くで!!」

大斧を持ったトラ耳少女が大斧を振り落とす

「ちっ っ」

「 次は私 っ」

短剣を持った黒猫耳の少女はエクレに無数の短剣を投げつける  
なんとか避けるもそれは誘導だった

「私を忘れないくださいね」

弓矢を持ったウサ耳をした少女はエクレに弓を放つ

「ぐっ!?!しまった!目隠しか!?!」

弓はエクレではなく、エクレの足元に着弾  
フロニヤ力を纏った弓のため爆発が起こり、砂煙が起こる  
そのためエクレの視界が砂煙によって奪われてしまったのだ

「もらった!!」

トラ耳少女がエクレの背後から現れ大斧を振り落とす  
咄嗟のためエクレは防御も回避もできない

（ここまでか　　）

エクレがそう思った  
その時だった

ガキン！！

「なっ！？」

「えっ　　！？」

「ふえっ!？」

鳴り響く金属音。トラ耳少女の斧が防がれている  
だが、それはエクレが防いだものではなかった

「大丈夫かい？」

「えっ、お前は」

「あんた、何者や!!」

トラ耳少女が斧を構えて警戒している

「僕はカイト。レオ閣下から」

「貴様は乱入者!!何で貴様がここにいる!!」

カイトが話している途中、エクレに邪魔されてしまう

「今、説明しようとしたんだけど　まあ、いいや。えっと、君  
たちがジェノワーズかな？」

「そうや!ウチ達がガウル様直属親衛隊ジェノワーズが一人。ジョ  
ーヌ・クラフティ!」

「　　同じくジェノワーズが一人。ノワール・ヴィノカカオ  
」

「同じく。ベール・ファールトン!」

ドガンと決めポーズをする三人

「あれ？秘密諜報部隊じゃなかった？」

「それがあいつらの本当の部隊名だ。というか、本当に何をしに来たんだ、お前は」

そんな三人を無視するカイトとエクレ

「コラ！無視すんな！！」

「ごめんごめん。えつとね、タレ耳さん」

「親衛隊長エクレール・マルティノッジだ！タレ耳と呼ぶな！」

「すみません、エクレールさん。僕はここに来た理由だけど、終わらせに来たんだ」

「何を？」

エクレの質問にカイトは笑顔で答えた

「この戦をさ！」

「む」

「でも、レオ閣下にジェノワーズとガウル殿下を懲らしめろって言われてるからあの三人を倒す」

双剣を構え直しジェノワーズの三人を見るカイトだが、エクレはそれを許さなかった

「ちょっと待て！あの三バカは私が倒す！手出し無用だ！」

「うーん　それじゃあ一緒に戦う？」

「なに？」

「1対3んじゃ分が悪い。僕も協力するから一緒に戦おう」

「断る」

即答するエクレに少しずっこけるカイト

「ど、どうして？」

「貴様などの助けなどいらん」

「でも、姫様を早く助けたいんでしょ？」

「うっ」

「だったら手段を選んでいる場合じゃないでしょ？」

「それはそうだが」

まだプライドが許せないのか協力を躊躇うエクレ

「それに出来なかったら僕がレオ閣下に怒られちゃうからさ。エク

レールさんに協力して欲しいんだ。お願い」

「ま、まあ、そこまで言うのなら協力してやる。感謝しろよ」

「うん。ありがとう、エクレールさん」

そう言う二人はジェノワーズを倒すため協力することになった

「なんやよくわからんけどやるんならやってやるで！！」

「負けない」

「お相手いたしますわ」

ジェノワーズたちも二人を見て戦闘態勢に入った

「足を引つ張るなよ、乱入者」

「はははっ、うん！気を付けるよ」

カイトとエクレーの協力戦線が始まった

## EPISODE 8 『決着!!』

「はっ！」

「わあっ!？」

「うりゃあ！」

「ひゃあっ!？」

カイト・エクレ対ジエノワーズの戦闘が始まって数分  
戦況は一気に変わっていた

「ただ一人増えただけなのにこんなに攻め込まれるやなんて!？」

（確かにまさかこんな簡単にあの三バ力をここまで追い込むことができるなんて      それも全部      ）

エクレはチラッと視線を動かす。そこにいたのは

「はあっ！」

「うっ」

ノワールを双剣で弾き飛ばすカイトだった

（この男。邪魔をするどころか私のやりたいこと、やって欲しいことを理解して動いている。本当に何者なんだ      ）

エクレがそう思う中、決着は着いた

「疾風双刃!!」

「いやあああつ!?!」

カイトの三連撃がベールに襲いかかり無惨に宙を舞う

「あううう 降参です」

「ベール!?!」

「油断大敵だぞ」

「しもう わああああつ!?!」

やられたベールに気をとられたジョーヌの隙を狙い見事に一撃を喰らわした

「こ、降参や」

「さて、残ったのは君だけだけど」

「」

残ったのはノワール・ヴィノカカオ。ただ一人

「 降参します」

どこから取り出したのか白旗を取り出してノワールは降参を口にした



「やりましたね、エクレールさん」

「ああ」

勝てたのは嬉しいがどうも納得がいかないエクレ

「それじゃあ次はガウル殿下と勇者さんのところへ向かおう」

「ちょっと待て。お前、レオ閣下からこいつらを懲らしめろって言われたんだろ？この程度で良いのか？」

エクレの言葉に余計なことを言うな、と言いたそうなジェノワーズ

「うーん　まあ、それも一理あるけどジョーヌさんやベールさんには十分に懲らしめたし」

「それではノワールにもやれ。あいつらには我々ビスコッティにも迷惑をかけられたのだから。当然の報いだ」

「うーん、他国のみんなに迷惑をかけたのはいけないことだしわかったよ」

「っ！？」

カイトが自分のところに向かってくるのを見てノワールは怯える

「か、カイトさん。できれば穏便に」

「せ、せや。うちらかて悪気があってやった訳やあらへんから

「

「

「

怯えるジェノワーズは笑顔で向かってくるカイトを見てさらに怯える。この状況で笑顔は逆効果らしく、背後に黒いオーラが見えてい  
るらしい

「

「

カイトはノワールの目の前に立って手を伸ばす

「っ

「

ノワールは衝撃に耐えるため目を瞑る

コッソ

「えっ？」

「もうこんなことしちゃダメだよ」

何が起きたのかわからないノワール  
ぽんと肩を叩かれるくらいの衝撃とカイトの小さな子供にけるよ  
うな優しい言葉

「わかった？」

「は、はい」

「ジョー又さんとベールさんもわかった？」

「は、はい！」

啞然としていたジョー又とベールは驚きながらも返事する

「うん それじゃあ、ガウル殿下と勇者さんはどこにいるのか教えてもらえるかな？」

「はい あちらです」

「あっちだね？ありがとう、ノワール」

「い、いえ」

カイトのお礼にノワールは頬を赤らめて俯いてしまう

「お、おい。それは仕置きというのか？」

カイトがノワールに教えてもらった方向へと向かおうとしたらエクレに止められる

「いいんだ。三人ともちゃんと反省してるみたいだし、それに」

「それに？」

「後からやってくるレオ閣下にお仕置きされると思うからほどほどにしておこうと、ね」

「ああ　なるほど」

「それじゃあ僕は行くよ。あの二人を止めないと」

そう言ってカイトはシンクとガウルの元へと向かった

「何者なんや、あのカイトって男。めちゃくちゃ強いやん」

カイトが立ち去り、身体に力が抜けるジョーヌ

「うん　でも、とても優しい人」

「そうですね。私を倒したときも手加減して下さいましたし」

「また　会えるかな？」

「どうやるな？なんやノワール。あいつのこと気にいったんか？」

「わからない　でも　頭を撫でられて心がぽかぽかした

またして欲しい」

カイトに撫でられたところに手を置きながらそう言うノワール

「まあ、レオ閣下の関係者みたいやからまた会えるとは思うけど」

「エクレちゃんは何か知っているみたいですね。何者なんですか？」

「私も今日の戦で初めて会ったから詳しくは知らん。それより後ろを見た方がいいぞ」

「「「えっ？」」」

エクレに言われて後ろを向くジェノワーズ

そこには、レオとゴドウィンがいた

「お主ら、覚悟はできてるな？」

「「「いやあああああああつ！！？？」」」

ジェノワーズの叫び声の後に三つの鈍い音が聞こえるのであった

ガキイン！

「くっ！」

「ぐっ！」

その頃のシンクとガウルは激しい戦いを続けていた

「てか、この後コンサートってマジか？マジなのか？」

「だから、そう言ってんじゃないか！」

「あんの、ジェノワーズのアホ共が。また適当な仕事をしやがったな」

どうやらガウルにはコンサートがあつたことはジェノワーズから知らされていなかったようだ  
さすがのガウルもそれを知っていれば戦を始めようとはしなかったであろう

「くそがっ！こうなりや自棄だ！勇者をぶっ倒して終わらせてやる！」

「僕は姫様のために負けらんない！！」

お互いに距離をとり、輝力を解放させる

「これで」

「決着を」

「着ける!!」

二人は同時に走り出す  
そして二人の武器が

「そこまで!!」

ガキン!!



「「なっ!？」」

ぶつかる直前、誰かが割り込み二人の武器を受け止める

「ガウル殿下に勇者さん。そこまでだ」

「あなたは」

「な、なんだてめえは!」

「あなたがガウル殿下ですね?僕はカイト。レオ閣下の命であなたを止めるように、と」

「あ、姉上が」

レオの名前が出た瞬間、青ざめるガウル

「もうすぐレオ閣下がこちらに來ます。ですから」

「悪いがもう止められねえ。俺は勇者と決着を着ける。邪魔すんならてめえをぶっ倒す!!」

紋章を発動させるガウル  
もう後には退けないようだ

「やるしかないか、勇者さん」

「は、はい！」

「ガウル殿下との決着はまた今度と言うことで構いませんか？」

「は、はあ」

「それじゃあ！」

ボワァ！！

カイトは蒼炎を身体に纏う

「蒼炎　まさかてめえが　」

ガウルはゴドウィンから話を聞いていた

（確か蒼炎を操る赤い服の少年にやられたって　）

ガウルは、にやりと笑う

「そうか。てめえがゴドウィンを倒した奴か。ちよっどいい、俺は  
てめえとも戦いてえなと思ってたんだ！！」

武器を投げ捨て、輝力を解放させる

「『獅子王爪牙』！！」

「それは光栄の極み！『蒼炎舞』！！」

カイトの蒼炎がさらに燃え上がる

「うおおおおおっ！！」

「はあああああっ！！」

「なっ！？」

ガウルの猛攻を捌ききり、懐へと潜り込む

「『旋風滅双刃』！！」

「ごわあっ!？」

カイトの六連撃にガウルは弾き飛ばされる

「ぐっ　やるじゃねえか　」

「さすがガウル殿下。あの連撃の半分を防ぐなんて」

ガウルはゆっくりとだが立ち上がる

カイトの言う通り、六連撃の旋風滅双刃を防いでいた

「よく言うぜ。一発一発が、すげえ威力で全部喰らってたら立てる自信が微塵もねえよ」

「今のは本気に近い強さでやりましたからね」

「まだ本気じゃねえってか？上等じゃねえか。おい、勇者！二人でやるぞ！」

「えっ？」

「うん！僕もこの人とまた戦ってみたかったんだ!!」

「ええっ!？」

戦いを鎮静に來たのに逆に盛り上げてしまう形になってしまっ

「ガウル殿下はともかく勇者さんは姫様を　」

「行くぞ、勇者！」

「うん!!」

まったく聞く耳を持たない。この世界は人の話を聞かない人が多い気がする

「仕方ない

」

カイトは双剣を構え直し二人と戦おうとするが

ドコオンッ!!

「「うえっ!?!」」

いきなり壁が吹き飛んだ

いきなりのことに驚愕するシンクとガウル  
その壁があつた方を見ると

「ガウル       ！それにビスコッティのへっぽこ勇者！！」

「あ、姉上！？」

「へ、へっぽこ？！」

レオの登場に二人はさらに驚愕  
怒るレオは息を思いつきり吸い大声を出して言った

「ガキ共おおおお！！戦場でなにを遊んでおるかあ！！！」

「「ご、ごめんなさいい！！??」」

レオの迫力にシンクとガウルは早く綺麗に頭を下げて謝った

「まったく ジェノワーズを止めておったからこっちも大丈夫  
かと思っておったのじゃが カイトはどうした？」

きよろきよろと回りを確認するが、居たはずのカイトがいない

「姉上 あれ」

「むっ？」

ガウルが指さす方を見ると

そこには瓦礫から飛び出ているカイトの手があった

「カイト！？誰にやられたのだ！？」

（（あんだだよ）（）

シンク、ガウル、ゴドウィンの思考が重なった

そう、カイトが埋まっているのはレオが吹き飛ばした壁が原因であつたりする

ちなみにカイトは瓦礫の当たりどころが悪く気絶していた



EPISODE 9 『腕輪』 (前書き)

久しぶりの投稿です

## EPISODE 9 『腕輪』

姫様奪還戦が強制終了させたレオと主犯達がhミルヒがいる部屋へと向かっていた

「レオ様、申し訳ございません。こんな事とはつゆ知らず」

「よい。悪いのはそのバカ二匹だ」

「」

頭にたんこぶをできているシンクとガウル  
どうやらレオにたっぷり絞られたようだ

ちなみにカイトは

「二人とも大丈夫？」

「なんであんたはそんなにピンピンしてんだよ」

怪我一つなく、落ち込む二人を励ましていた

「邪魔するぞ」

「あっ！？レオ様！！」

入った部屋には攫われたミルヒがそこにいた

「あの　ご無沙汰　」

「すまなんだな、ミルヒオーレ姫殿下。戦勝国の宴の邪魔など無粋の極み。お主の都合無視して連れ出した不祥の弟の非礼を詫びよう」

「いえ！あの、ガウル殿下はご存知なくて」

「今回のことは何か別の形で詫びを考える。今は早く戻るとよからう」

「レオ様」

「」

レオのミルヒに対する素っ気ない態度にカイトはただ黙って見ていた

「ルージュ、後は頼んだ」

「あ、はい」

「カイト、お主も来い」

「あ、うん　おっと」

レオに呼ばれついて行くことするが何かを思い出し振り向くカイト

「ミルヒオーレ姫殿下、でしたよね？」

「は、はい！」

いきなり呼ばれてびっくりしたのか耳と尻尾を立てながら返事をす

るミルヒ

「申し遅れました。僕の名前はカイト。レオ閣下の領地、ガレット獅子団領地の勇者をしております。これからよろしくお願いします！」

「は、はい。こちらこそ」

「それでは失礼します」

礼儀正しく挨拶を終えたカイトは早足でレオを追いかけた

その数秒後に起きる驚嘆の声に気づかずに

「まったく お主という奴は 何故、セルクルを使わんのじゃ」

「ごめん。走って行った方が早いかと思って」

城の渡り廊下で話す二人

「ねえ、レオ閣下」

「なんじゃ？」

「ミルヒオーレ姫殿下と距離を置いているのは何で？」

「」

カイトの質問に黙り込むレオ

「ごめん、言いたくないならそれでも構わない。でも、どうしても一人では抱えきれなくなったら言って欲しい。力になれるかもしれない。僕はレオ閣下の、ガレットの勇者だから」

「

カイトの言葉にレオは少し驚きの表情を見せるがすぐに微笑んでみせる

「ふつ　　すまぬな  
どワシもまだまだだのう」

「

着たばかりのお主に心配させるな

「そんなことはないよ。レオ閣下は頑張ってる。この世界に着たばかりの僕でもそれがよくわかる」

「そうか　　」

レオは先ほどまでの険しい表情ではなくなり肩の荷が落ちたような気持ちになった

「何じやろうな

お主の言葉には癒しの力があるのかのう

」

「えっ

？」

「いや、何でもない。ワシはドーマを迎えに行く。カイトは入り口で待っておれ」

「うん、わかった」

「ん

？」

レオと別れ、待ち合わせの場所へと向かうカイトだが、その場所には先客がいた

「おおっ、カイト殿でござるか」

「あなたは

ブリオツシュ・ダルキアン卿、でしたよね」

そこには獣玉になった戦士達と触れあうブリオツシュがいた

「その通りでござる。名前を覚えてもらえて嬉しいでござるよ」

「こちらこそ。ブリオツシュさんは何をしているんですか？」

「拙者は今まで旅に出ていた故。今、ビスコッティはどんな状態なのかをこの子達に聞いていたのでござる」

「旅ですか。楽しそうですね」

にこつと笑うカイトにブリオツシュも笑顔で返す

「うむ。カイト殿は何故ここに」

「僕はレオ閣下とここで待ち合わせを」

「そうでござったか。それにしても」

「はい？」

ブリオツシュはカイトの顔から手首へと視線を動かす

「その白く輝く腕輪は何でござるか？」

「！！」

ブリオツシュの言葉にカイトは目を見開いた

「ブリオツシュさんには腕輪が見えるんですか？」

「むっ？見えるでござるが　みんなは見えないでござるか？  
カイト殿の右手首に付いている腕輪が」

「「「???」」」

獣玉のみんなも見えていない。どうやらここに居る中で見えているのはブリオツシュだけのようだ

「どうやらその腕輪は特殊な物であるようでござるな」

「ええ、まあ」

「詳しく聞かないでござるよ。拙者の旅について聞いてこなかったでござるからな」

確かにカイトは、ビスコッティが攻め込まれているにもかかわらず今ごろになつて帰ってきたブリオツシュに疑問を抱いていたでも、国に関わる重要な事であれば別である  
カイトはそれを察してあえてああ答えていたのだ

「で、ですがこの腕輪は決して危険なものではなくて」

「うむ。その腕輪の輝きを見ればわかるでござるよ。暖かい光、見ているだけで心が癒やされるみたいでござる」

「そう　　ですか　　」

それはアウラの祝福の光なのだろう。ということはカイトがまだThe Worldに帰れる可能性が残っていると考えても良いのかもしれない

「どうしたでござるか? そんな深刻そうな顔をして」



「あ、いえ、なんでも

ん？」

ふと、地響きに似た音が城からこちらへと近づいてくる

「ダルキアン卿にカイトさん～～～！！」

「ブリオツシュ、久しぶりです！！」

その正体はシンクに、シンクに背おられているミルヒがいた

「おお、姫様。それに勇者ど

」

ズバアアアンツ！と凄い速さでブリオツシュとカイトがいた所を通  
過するシンクとミルヒ

「姫様を送ってきま～～～す」

「行つてきまーす！！」

「うおおりゃああああああっ！！」

そう言つてシンクとミルヒは凄い速さで駆け抜けていつてしまつ

「はははっ、若いでござるなあ」

「いやいや、何言っているのですか。ブリオツシュさんも十分若い  
じゃないですか」

「ふふっ、ありがとつでござるよ、カイト殿。それでカイト殿は何

故、準備運動を？」

「僕も手伝おうかなって」

そう言つてカイトの身体が蒼炎を纏う

「ほう。では頑張つてくるでござるよ」

「うん！あつ、もう少ししたらレオ閣下が来ると思つたら来たら説明をお願いしますか？」

「うむ、心得た」

「それじゃっ！！」

カイトはさっきのシンクみたいに走り出した

「あつ、見つけた！」

「えっ、カイトさん？！」

「おおつ、カイト殿！さっきぶりでございます　　って何でございますか、その蒼い炎は？」

後ろから追いついてきたことにも驚いたが、カイトの身体に纏った蒼炎に驚くユキカゼ

「これは　　ここで言う輝力と同じものと考えていいかな？」

「おお、なるほどでございます」

「えっと、ガレットの勇者様」

「カイトで構いませんよ、姫様」

「あ、はい。えっと、カイト様はどうしてこちらに　　？」

「はい。僕も手伝おうかと」

「おおつ、拙者と同じでございますな　　」

ユキカゼもカイトと同じでシンクとミルヒの手伝いに来たようだ

「ありがとうございます。でも大丈夫。もうちょっと早い走り方を思いついたので」

「えっ？」

「『紋章を通じて出力できる輝力はイメージが明確なほど確かな形と力になる』。そうだよな？」

「はい」

「でござる」

「なら多分、こんな事も」

そう言つてシンクはミルヒをおんぶしたままジャンプする。すると、足下にフロニヤ力集結し炎が立ち上がる

そして、炎が消えるとその姿を現した

「出来た！」

それはサーフボートの形をした乗り物だった

「おおおっ、かっこいい！！」

「凄いね、シンク！」

カイトもユキカゼ也大絶賛

「という訳でユキカゼさん、カイトさん」

「『さん』は不要でござる」

「右に同じく」

「じゃあ、ユキカゼ、カイト。先に行くね」

「先につて？」

「姫様、しっかり掴まっててね！」

「待って、シンク。これを」

シンクが何かをしようとしたときカイトが呼び止めると何か瓶を渡した

「？ これは？」

「疲れたときに飲むといいよ。きっと元気になれるから」

「あ、ありがとうございます！！それじゃあ、行くよ！！ブーストライド！！」

ブーストからフロニヤ力が噴出される

「ゴー！！」

「きゃあっ！？」

ぶおっ！ともの凄い加速でカイトとユキカゼを置いて先に行ってしまう

「はあはあ

」

「はや

」

あまりの速さに唖然とするユキカゼとカイト  
さすがにあれに付いていくのは無理と判断した二人は立ち止まって

シンクとミルヒを見送った

「それじゃあ、ユキカゼさん」

「さつきも言ったでござるが『さん』は不要でござる」

「それじゃあユキカゼ『ちゃん』」

「それもちよつと」

恥ずかしいのか頬をかくユキカゼ

「ごめんごめん。それじゃあユキカゼ。僕は城に戻ろつ」

「そつでござるな」

「あつ、ユキカゼも疲れているみたいだし。これ飲む？」

「それは先ほど勇者殿に渡していたものでござるね。大丈夫なんでござるか？」

じーっと瓶を見つめるユキカゼ

「うん！ほら、この通り」

ごくごくと飲み干すカイト。すると、カイトの身体から疲れが一気に吹き飛んだ

「ほら、元気元気！」

元気をアピールするかのようにつなっている蒼炎が燃え上がる

「おおっ！では、拙者も試してみるでござる！..」

ユキカゼはカイトから瓶をもらい、その中身を飲み干した

「うっ！？」

「えっ？」

「カイト殿

騙したでござるな

」

胸を押さえながらカイトを睨みつけるユキカゼ。その表情は苦しそうだ

「そ、そんな筈は

」

もちろんカイトは嘘を吐いていない。しかし、もしかしたらカイト以外は毒なのかもしれない

「まあ、冗談でござるが」

「冗談！？」

何事もなく、ケロッといつも通りに話すユキカゼ。カイトは思わずずっこけてしまう

「いやいや、すまぬでござるよ。お決まりかと思ひまして」

「ひどいよ、ユキカゼ

それで身体の具合は？」

「大丈夫でござる。むしろ、かなり良くなったでござるよ!」

笑顔を見せるユキカゼを見てほっと安心するカイト

「それで、この水はなんでござるか？」

「これは『癒しの水』と言って名前の通り飲んだ人を癒やしてくれる水だよ。僕の世界のものなんだ」

「おおつ、カイト殿も確かガレットの勇者であつたでござるな。でも良かったでござるか？これは貴重なものでは？」

「大丈夫大丈夫、そんなものじゃないから」

The Worldでは誰でも手に入れることができる回復薬なため、ひとつやふたつ使っても問題はない

「それは良かったでござる」

「うん。それじゃあユキカゼ、戻ろう」

「でござる」

カイトとユキカゼは城に戻るため再び走り始めた



## EPISODE 9 『腕輪』 (後書き)

いや、本当にすみません

いろいろと忙しくてまったく更新ができなくて本当にすみません

これからも頑張りますのでよろしくお願いいたします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7979v/>

---

DOG DAYS ~ ~ ~ 蒼炎の勇者 ~ ~ ~

2012年1月5日19時49分発行